VIEW'S REPORT

多面的・総合的な評価による入試とインターネット出願の新たな試み

高大接続の改善を目指し、四国国立5大学が「活動報告書」を活用した入試を実施

徳島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学は、多面的・総合的な評価による入学者選抜を行うため、志願者が経験した諸活動を記載する「活動報告書」を、選抜資料として、まずは一部のAO入試で取り入れることにした。さらに、同5大学は共同のサイトを開設し、2016年度の一般入試からインターネット出願を開始。高校生が活動を自由に記録できるサイトも立ち上げ、進学準備の後押しをしている。

抜本的な入試改革を目指し、共同のアドミッションセンターを設置

四国にある5つの国立大学（徳島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学。以下、5大学）は、2013年、「四国5大学連携による知のプラットフォーム形成事業」連携協定を締結した。これは、5大学がそれぞれ持つ資源を効果的・効率的に活用するという観点から、教育活動や入試、産学官連携などにおいて、大学の枠を超えて共同実施し、それらの相乗効果によって活動の質・量ともに充実を図ることがねらいだ。

この事業の一環として、13年、愛媛大学をメーンオフィスとして、「四国地区国立大学連合アドミッションセンター」（図1）を設置し、志願者を多面的・総合的に評価するための選抜方法の開発・実施を進めている。同センター長を務める愛媛大学の井上敏憲教授は、その意義をこう語る。

「国立大学でも推薦入試やAO入試の実施が広がり、志望理由書の提出、面接や小論文が課されるようになりました。それによって、ペーパーテストのみの一発勝負で合否が決まる入試だけではなくなりましたが、大学が志願者の資質や適性をきちんと評価しているかというと、必ずしもそうではありません。そのため、多くの高校では、主体性・協働性などを育む探究学習などをしていても、一定の時期からは受験対策のみとなり、生徒の成長を中断させてしまっています。その原因は、大学の入試制度にもあると捉え、本センターでは抜本的な入試改革を目指しています」

「活動報告書」で日常的な学びを評価

大学が多面的・総合的な評価を行うためには、志願者に関する情報を増やす必要がある。その資料として同センターは、志願者が意欲的に取

図1 「四国地区国立大学連合アドミッションセンター」概要

参加大学	徳島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学
目的	四国地区にある5つの国立大学が共同でアドミッションセンターを設置して、志願者の資質や適性を総合的に評価する新たな入試を実施。日本の未来を担う意欲ある地域のリーダーの育成に資する。
活動内容	• 連合AO入試などの企画・実施 • 広報活動の企画・運営 • 入学予定者のフォローアップ • 高大接続、大学入試に関する調査・研究

り組んできた諸活動について報告してもらう「活動報告書」に着目した。

学力検査以外の選抜資料には、志望理由書や学修計画書が挙げられるが、それらは入学後の活動についてアピールする内容であり、あくまでも将来の展望となる。また、面接や小論文の場合では、生徒は多くの練習を積んで臨んでおり、自分をよく見せようとする側面が強くなりやすい。その点、「活動報告書」では、本人の実績に基づいた意欲・努力の成果を知ることができ、資質・能力の評価に適した資料と言えると考えた。

「私たちが評価したいのは、どのような考えの下にどう行動し、何を学び、何を得たのかという活動の過程です。優れた成績を残していないから『活動報告書』が書けないということはありません。成績のよしあしはともかく、熱意を持って取り組んできたことであれば、どんな活動でも書いてほしいと思います。もちろん、学校外の活動も評価の対象になります」（井上教授）

同センターでは、「活動報告書」を3種類（**図2**）に設定。5大学それぞれが、どれを選抜資料として課すかを決める。

「『活動報告書』は文章力を評価するものではありませんから、事実を的確に書ける量として300字にしました。また、多面的な評価の観点から、記入・入力できる活動の上限は3件としましたが、件数が少ないという理由だけで不利な評価はしません」（井上教授）

16年度は、愛媛大学が、社会共創学部、及びスーパーサイエンス特別コースのAO入試で「活動報告書」を利用。合計237人が出願した（「活動報告書」は紙での提出）。

「面接では、志望理由書での入学後の展望、『活動報告書』での高校での活動と、複数の情報を基に質問できたことで、志願者をより多面的に評価できました」（井上教授）

17年度入試では、愛媛大学に加えて、香川大学医学部看護学科、高知大学医学部医学科がAO入試で「活動報告書」を利用する。

今後の入試改革を念頭にインターネット出願を導入

同センターでは、5大学共同のサイトを開設し、インターネット出願も進めている。16年度に5大学が一斉に一般入試でインターネット出願を開始し、17年度入試では、AO・推薦入試にも拡大する。今後、紙出願を廃止し、インターネット出願に一本化する予定だ。インターネット出願では、同一の志願者が5大学の複数の入試に出願する場合、連絡先などの基本情報の入力が一度で済む。また、17年度入試からは一部の入試で「活動報告書」もオンライン入力が可能となる。今後、一般入試でも「活動報告書」などの提出書類が増えた場合、データで出願する方が整理・保存・管理しやすいというメリットが、志願者・大学側双方にある。

また、インターネット出願や「活動報告書」の作成を後押しするため、同センターは進学支援サイト「今ログ」（**P. 49図3**）を開設した。これは、自身の活動や考えを記録できるサイトで、誰でも無料で利用できる。

「出願時に3年間の活動を振り返るのではなく、1年生の時から活動の都度、その内容や自身の考えを記録することで、『活動報告書』の作成に役立ててほしいという思いから、このサイトを立ち上げました。高校の進路指導でも活用していただければと思います」（井上教授）

四国地区国立大学連合アドミッションセンター長、愛媛大学 教授

井上敏憲 いのうえ・としのり

愛媛県の公立高校教師を務めた後、愛媛大学に着任。大学教育総合センター及び教育・学生支援機構助教授を経て現職。

図2　5大学が設定した「活動報告書」の内容

- **意欲的に取り組んだ活動（3件まで）**
  ①活動名、②活動期間、③活動の説明（300字）、④参考資料
- **課題研究（1件）**
  ①テーマ、②そのテーマを選んだ理由、③概要・成果の説明（300字）、④個人研究・グループ研究の区別、⑤研究期間、⑥補足欄（300字）、⑦問い合わせ先（指導教員名）、⑧参考資料
- **資格・検定等（英語に関するもの3件、その他10件まで）**
  ①名称、②級、スコア、賞等、③取得等の年月

＊四国地区国立大学連合アドミッションセンター提供資料を基に編集部で作成。件数や字数等は入試の種類によって異なる場合がある

高校と大学の対談

高校教育と大学教育を真につなぐための改革を目指す

教科学力を評価した上で、意欲・適性の評価をプラス

――高大接続改革では高校教育改革も柱の1つです。高市校長の高校ではどんな取り組みをされていますか。

高市　本校の生徒は、真面目で努力家で協調性もあります。授業でのグループ学習は活発で、行事や部活動にも一生懸命取り組みます。ただ、何事も素直に受け止める傾向があり、例えば、自ら挙手をして発言することは少ないように感じます。そうした気質を変えていこうと、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業改善を進め、さらに、授業、行事、部活動などの教育活動を点や線から面の活動にしていくために、カリキュラム・マネジメントの観点で見直し始めました。ただ、心配なのは、今後の大学入試改革の動きです。本校では毎年、国公立大学に120人前後が進学します。そのため、今は、従来型の受験指導をしながら、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業でどこまで教科学力を伸ばせるのかを試行錯誤している状態です。多面的・総合的な評価による入試は、今はAO入試が中心ですが、今後どう広まっていくのかが気になります。

井上　高大接続システム改革会議の最終報告などでは、一般入試でも多面的・総合的な評価を行うこととしています。従来の一般入試ではほとんど行われていない評価ですから、そこに注目が集まっています。ただ、大学は高等教育機関ですから、入学者に相応の教科学力を求めることは必須です。これまで通り、教科学力をしっかり評価した上で、意欲や適性などの評価はそれにプラスするというイメージです。その影響力をどう捉えるのかは人それぞれだと思います。例えば、一般入試で意欲・適性に関する評価の割合が10％だとすると、10％くらいなら合否に影響はないという考え方もあるでしょうし、現状では加味されていない要素が評価の対象となるのだから10％でも影響は大きいという捉え方もあるでしょう。

　高校では、以前から教科学力以外にも、行事や部活動などで人間性を育む教育も重視していますし、今や大学も、知識・技能だけでなく、主体性や協働性なども育もうとしています。その間をつなぐ大学入試だけが取り残されているのです。高大の教育の連続性を確保するために、大学入試も意欲や適性などを加味するものになって然るべきだと考えます。

高市　本校では「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を中心に、海外の姉妹校との交流やキャリア教育を充実させ、様々な人との出会いや体験を通して、生徒が自らの個性を見極め、その力を伸ばすことを目指しています。大学には生徒の力が自学で伸びるのかどうかを評価してもらい、大学でさらに活躍の場が広がるという高大接続ができればよいと考えています。

広島県立広島井口（いのくち）高校　校長
高市和子　たかいち・かずこ
同校に赴任して6年目。同校では「総合的な学習の時間」を中核として全教科で能動的協働的な学びを推進中。

井上　これまでは、そうした生徒がいても、大学入試のために3年生の夏休みから受験対策のみとなっていました。伸びている生徒は高校3年間、伸び続けてほしいですし、そうしたことを評価して大学に入学させたいと考えて、四国国立5大学では入試改革を進めようとしています。

高市　高大接続システム改革会議の最終報告などを読むと、大学入試が大転換するのではないかと思いましたが、井上先生のお話を伺うと、大学入試に多面的・総合的な評価を取り入れることは自然な流れで、これまで教科学力に偏っていた評価を、

高校3年間の諸活動を総合的に評価する形にするのだと分かりました。

3年間の活動を評価に結びつけるための記録を

――多面的・総合的な評価による入試の実現にあたり、四国国立5大学では、選抜資料として「活動報告書」を取り入れられました。

井上　愛媛大学のAO入試の中には、「活動報告書」を面接の資料に用いて面接の評価に反映したもの、「活動報告書・志望理由書・調査書」を一括りの配点にしたものもあります。「活動報告書」は、主体性・多様性・協働性などの評価に適していますが、学力の3要素のほかの2つの要素を評価する資料にもなります。どの要素をどの方法で評価するのかは、大学・学部のアドミッション・ポリシーによるでしょう。一方、選抜資料として用いる以上、評価基準を示すことが必要と考え、県内の2つの高校と連携して、高校の課題研究のルーブリックを作成しました。大学が評価の観点を示すことで、高校生の活動の充実にもつながると考えています。

高市　総合学習などの取り組みを評価する指標が明確に示され、それによって入試で評価してもらえるのは、生徒にも大きなメリットになります。

井上　学習、部活動、行事など、高校時代に一生懸命頑張ってきたことが、総合的に大学進学に結びつくのが「活動報告書」です。適切な評価につなげるためには、1年生から活動の都度、その内容を記録することが重要になると思います。なぜなら、出願時に書こうとしても、1年生の頃のことはあまりよく覚えていないからです。そこで、「今ログ」（図3）を開設しました。出願時には、「今ログ」に書きためた記録を基に書類を作成すれば、内容は正確ですし、手間も軽減できると考えました。

高市　本校では、総合学習や行事などの振り返りは紙での記録で、トータルに振り返るシステムにはなっていません。データとして1か所に保管できれば、ポートフォリオとして活用できます。

井上　「今ログ」は、教師が把握しづらい学校外の取り組みも記録できます。進路指導に活用することで、生徒をより多面的に見取ることにもつながればと思います。

高市　「活動報告書」の内容がより充実したものとなるよう、今まで通り、日々の指導を大切にするのはもちろん、高校3年間のポートフォリオをどのように残していくのかも重要だと感じました。自分が頑張ったことは何か、どのような力がついたのか。そして、これから何を身につけていきたいのか。高校でも、生徒個々の3年間を多面的・総合的に見て、評価できる仕組みが必要だと思います。

井上　高校教育も変わりつつあり、学生が高校で多様な経験を積んで大学に入学していることを、あまり意識していない大学教員もいます。高校と大学が密に情報交換をし、協力し、新たな仕組みをつくって、学生の力をさらに伸ばしたいと思います。

図3　「今ログ」の画面

「今ログ」には、「意欲的に取り組んだ活動」「課題研究」「資格・検定・コンテスト等の状況」を記録できるほか、「進路メモ」として自分の考えも残すことができる。5大学への出願を前提とするものではなく、メールアドレスとパスワードを登録すれば誰でも無料で利用できる。
https://shikoku.applyjapan.com